

【実践報告】

沖縄県A地域で生活する高齢者の看取りに対する思い —— 沖縄の文化が高齢者の看取りに及ぼす影響 ——

富山 千穂, 永田美和子

Thoughts on End-of-life Care for Elderly People Living in Okinawa Area A —— The Influence of Okinawan Culture on End-of-life Care for the Elderly ——

TOMIYAMA Chiho, NAGATA Miwako

I 緒言

日本における高齢化は進展しており、2020年における65歳以上の高齢者人口が過去最高の3,619万人であり、高齢化率は28.8%と超高齢社会を迎えている（内閣府, 2020）。高齢化が進展する中で、2020年における日本の死亡者数は137万2,648人であり、65歳以上の高齢者の死亡率は88%と全死亡者数の中で高齢者の死亡率は高い水準であり、多死時代となっている（厚生労働省, 2020）。死亡場所の割合は病院が約72%、次いで自宅が約14%、介護施設等が約10%、その他が約2%で、依然として病院で亡くなっている割合が高い（厚生労働省, 2019）。

高齢者の多くは、他者の死を含め死について考えたことがあり、死亡場所として在宅を選ぶ傾向がある一方で、病气を持つ高齢者は、最期は迷惑をかけず全ての苦痛を感じることなく逝きたいと、安楽に過ごすことを求めて病院での死を希望していることが報告されている（彦ら, 2011）。終末期を迎える場所の変化について、終末期に至った原因疾患により希望する死亡場所が異なることも報告されている（平川ら, 2006）。最期まで迷惑をかけずという思いの中には、家族に対する思いも含まれていると考える。介護者が自宅での看取りを希望する要因の一つに療養者が自宅を希望していることが挙げられている（荒木ら, 2008）。しかし、自宅を希望していたとしても、それを高齢者は他者に伝えることは少ない（木内ら, 2004）。また、高齢者の多くは、リビング・ウィルを知らないと報告されている（彦ら, 2011）。看取りに対する希望はあるが、それを伝えることは少なく、自分の意思表示をする方法を知らないことや意思表示をする場の提供が少ないことが現状としてある。そのため、高齢者が最期をどのように過ごし、どのように看取られた

いかという高齢者の看取りに対する意思を尊重することは重要であると考えられる。

沖縄にはヌジファやニライカナイ、清明祭といった故人に対して親族の健康を願い、あの世での生活を快適に過ごしてもらうようにお祈りをする文化が存在する。病院や施設においても「ヌジファ」を遺族が希望し、多くの病院・施設が認めており、これらが遺族の心理的安堵感の獲得に影響しているということが報告されている（近藤, 1992）。また、大城（2005）は、元気で長生きすることを目標に、家族とのつながりや死後の魂をケアする「ヌジファ」等の地域の文化を大切にしながら、住みなれた地域で死を迎えることを支え合う民間的ケアが伝承されていたと報告している。

久高島を対象とした研究では、高齢者は生活の満足度が高く、「生きがい感」が強くあり、その理由として、伝統行事に関わってきたことによるアイデンティティーの根幹をなす神事を生きがいとしてこれまで生きてきた事が挙げられており、さらに、残された自然や島民同士の交流によって高齢者は互いに助け合いながら島で一生を過ごしたいと考えていることを報告している（川元, 2013）。沖縄の文化が高齢者のアイデンティティーの構築に関係しており、それらが生きがいや生活満足度に影響をしている。高齢者の死へのニーズについて、大城（2005）によると、【安らかな最期を迎えたい】、【自分の最期は自分で決めたい】、【最期まで誇りを持って逝きたい】というニーズがあり、これらのニーズに向けて高齢者は【自分の健康は自分で】、【つながりを大切に】、【ゆんたくを楽しむ】という行動の特徴が見られることを報告している。このことから、高齢者は自らの健康を第一に考え、余生を楽しみ最期を迎えるための準備をしていると考えられる。しかし、看取りに対する文化的影響に

ついて示している研究は少ない。本研究は、地域で生活する高齢者の看取りに対する思いを明らかにし、沖縄の文化が高齢者の看取りに及ぼす影響を検討することを目的とする。地域で生活する高齢者の看取りに対する思いを明らかにし、沖縄の文化が高齢者の看取りに及ぼす影響を検討することによって、看取られる本人の意思を尊重しながら、沖縄の文化を活かした看取りケアを病院でも在宅でも実施する一助となり、よりよいケアに繋がると考える。

II 研究目的

本研究は、地域で生活する高齢者の看取りに対する思いを明らかにし、沖縄の文化が高齢者の看取りに及ぼす影響を検討することを目的とする。

III 方法

1. 研究対象

A市の老人会に参加し、自由に自分の思いを話すことが可能で、本研究の同意が得られた高齢者5名を対象とし、半構成的面接を実施した。

2. 調査期間

平成27年5月から平成27年10月

3. 研究場所

本研究の同意の得られた高齢者に対して、インタビューを行った。インタビュー場所は本人と相談のうえ、希望する公民館や私的な場所で行った。

4. 研究方法

1) インタビュー内容

(1) 基本属性：性別、年齢、字、配偶者の有無、世帯形態、疾患の有無（既往歴）

(2) 看取りについて

これから先どのように生活していきたいと考えているか、また人生のいろいろな時期に老いについて想像したり考えたりしたことがあるか、自分の最期をどのように演出したいと考えているか、家族にどうしてほしいなどの希望はあるか、看取りに対する思いを誰かに話したことはあるかである。

2) データ分析

ICレコーダーで録音したインタビュー内容の逐語録を作成し、看取りと沖縄の文化の影響について述べている部分の抽出を行った。また、共通している言葉を類似

性に基づいてコード化しさらにサブカテゴリー化、カテゴリー化し分析することにより看取りに関連する思いと沖縄の文化の及ぼす影響を明らかにした。信頼性の確保のため、指導教員からの指導を受けた。

5. 倫理的配慮

研究対象者である対象地区区長および老人会会長に研究目的、内容、方法、調査への参加は自由意思であること、調査協力の有無が不利益を被らないことを文書と口頭で説明し、了承を得た。その後、紹介された研究対象者に対し、研究の目的や方法、調査への参加は自由意思であること、調査協力の有無が対象者の不利益にならないこと、インタビューはいつでも中止できることを文書、口頭で説明し、同意が得られた場合にインタビューを実施した。インタビューで得られた情報は研究目的以外では使用しないこと、個人のプライバシーの保護、匿名性の保護、秘密保持に努めること、研究終了後は、紙類データは細断し、逐語録は消去することを合わせて説明した。

6. 用語の定義

看取り：林（2014）は看取りを「死を迎えさせる時期の看護、介護をさすが、厳密には慢性疾患を有する高齢者の終末期において、緩和ケアを実践するということの意味している」と定義している。また、清水（2005）は、「近い将来に生命の終末が予測される高齢者に対して行う臨終場面を意識したケア」としている。これらをふまえて、本研究では「死を迎える時期の看護、介護をさし、高齢者に対して行う臨終場面を意識したケア」とする。

IV 結果

1. 対象者の概要（表1）

研究対象者は5名であった。年齢は、全員が70代であり、平均年齢は73.6歳（±1.0歳）であった。性別は男性が2名、女性が3名であり、配偶者の有無については、4名は配偶者がおり、1名は配偶者がいなかった。

表1 基本属性

	年齢	性別	配偶者の有無	世帯形態	既往歴
A	70代	男性	有	夫婦、子の3人暮らし	心筋梗塞、大動脈弁狭窄（弁置換術施行）
B	70代	男性	有	夫婦	大腸がん、肺がん（手術実施）
C	70代	女性	有	夫婦	脳卒中（内服治療） 左手首・腰部骨折
D	70代	女性	有	夫婦	子宮筋腫、両膝関節症 C型肝炎（内服治療中）
E	70代	女性	無	ひとり暮らし	軟骨のすりへりによる足の痛み

世帯形態は、夫婦のみが最も多く、次いで夫婦・子の3人暮らし、ひとり暮らしとなっている。既往歴については、心筋梗塞やがん等であった。平均インタビュー時間は43.6分(±27.6分)であった。

2. 看取りに対する思い

【 】をカテゴリー、〈 〉をサブカテゴリー、「 」を対象者から得られたインタビュー内容とした。

1) 老いを感ずる時(表2)

老いを感ずる時に関しは、【加齢に伴う身体的変化の実感】、【認知能力の衰えを実感】、【家事に関する老いの支障はない】、【自己と他者の老いのイメージの相違】、【老いへの寂しさ】の5カテゴリーに分類された。

【加齢に伴う身体的変化の実感】では、〈筋肉の衰えに伴う動作の緩徐〉や〈動くことが億劫〉であるという動作に関することや、〈竹馬や自転車に乗れない〉といった機器を使った運動に対すること等、高齢者は加齢に伴う〈身体的変化を実感〉していた。

【認知能力の衰えを実感】では、「そうだね。物忘れが多くなったかね。あの～テレビみて、あの女優の名前、俳優の名前誰かになって思いたすのに苦勞するんだな。(中略)」と〈もの忘れの増加〉がみられ、昔と比べて〈計算力の衰え〉や〈判断力の衰え〉を実感していた。

【家事に関する老いの支障はない】ことは「家事はそんなにかかわらない(中略)」と日常的に家事をしているため、〈家事に関する老いの支障はない〉と語った。

【自己と他者の老いのイメージの相違】では「そうですね。むこうから…あー、他人から見ても若いと思ってるけど、私からみたら結構年いってるんじゃないのって。んー、子どもたちはそう思っていないみたい。私だけだね。(中略)」と自己の老いを実感しているのに対し、家族等の他者による老いの実感はないことから〈自己と他者の老いのイメージの相違〉があった。

【老いへの寂しさ】では、「年取るとそんななのかなあって思うと自然かなと思うけど、ちょっとさびしいな。」と年を取ることに対して〈老いへの寂しさ〉を感じていた。

表2 老いを感ずる時

カテゴリー	サブカテゴリー
1. 加齢に伴う身体的変化の実感	身体的変化を実感
	筋肉の衰えに伴う動作の緩徐
	動くことが億劫
	竹馬や自転車に乗れない
	老眼への変化
2. 認知能力の衰えを実感	体力の衰え
	骨・関節機能の低下
	もの忘れの増加
3. 家事に関する老いの支障はない	計算力の衰え
	判断力の衰え
	モノの考え方が固執傾向
4. 自己と他者の老いのイメージの相違	家事に関する老いの支障はない
	自己と他者の老いのイメージの相違
5. 老いへの寂しさ	老いへの寂しさ

2) 現在の生活と今後の生活について(表3)

現在の生活と今後の生活については、【病気に対する不安や悩み】、【健康に留意して日々実践】、【やる気の保持とゆっくりとした生活】、【充実した現在の日課の維持】、【心身の安寧のための趣味の継続】、【長寿への思い】、【子や孫の顔を見ることが楽しみで生きがい】、【現在の生活の継続を希望】の8カテゴリーに分類された。

【病気に対する不安や悩み】では〈癌の再発に対する不安〉や「最近血糖のことで悩んでいる」と〈血糖値に関する悩み〉があった。

【健康に留意して日々実践】では、「入院しているとき、寿命が無いなと思った」と〈健康に留意するようになったきっかけ〉から、〈健康に生活するための独自のこだわり〉を持ち、〈日々の体操の実践〉や〈健康に留意した日々の食事〉をしていた。また、〈健康増進課からの支援〉といった社会資源の活用や〈最善の解決策への模索〉をしていた。

【やる気の保持とゆっくりとした生活】では、「やる気がなくなるに程度に(生活に気をつけている).」,「あんまり気張らんで、(中略)ゆっくり生活できたらいいねって思ってる」と〈やる気の保持とゆっくりとした生活〉への思いがみられた。

【充実した現在の日課の維持】では、〈日常生活の場へのこだわり〉があり、〈買い物できることによる充実した毎日〉を送っていた。〈生活リズムの調整〉や〈娯楽や老人会などによる日常生活の忙しさ〉があり、日常生活の忙しさの中でも〈公園でゆんたく〉をしていた。

【心身の安寧のための趣味の継続】では〈農業は運動であり、趣味の1つ〉としており、農業を通して〈自分でつくった野菜は特別おいしい〉と感じていた。また、

農業をするにあたって〈農業を共有することによる安心感と今後の楽しみ〉や〈畑に行くことによる体調管理や幸福感とリラックス効果〉を実感していた。さらに、〈ジャガイモほり開催による地域住民との関わり〉を通して地域における農業の普及に努めていた。その上、〈農業は人材育成と類似し興味が尽きない程未知数で魅力的〉であり、農業への特別な思いがあった。農業以外にも〈趣味は段位を持っている囲碁〉や〈イザリが趣味〉であることを語った。

【長寿への思い】では「何歳まで生きるんだろうね。(中略)90なっても元気な人もいるさーね。うらやましいね。(中略)」と〈自分の今後の心配と長生きしている方への羨望〉を語った。

【子や孫の顔を見ることが楽しみで生きがい】では「孫を目に入れても痛くない」ことや「子どもたちも最近は

表3 現在の生活と今後の生活について

カテゴリー	サブカテゴリー
1. 病気に対する不安や悩み	癌の再発に対する不安 血糖値に関する悩み 健康に留意するようになったきっかけ 健康に生活することための独自のこだわり
2. 健康に留意して日々実践	日々の体操の実践 健康に留意した日々の食事 健康増進課からの支援 最善の解決策への模索
3. やる気の保持とゆっくりとした生活	やる気の保持とゆっくりとした生活 日常生活の場へのこだわり 買い物できることによる充実した毎日
4. 充実した現在の日課の維持	生活リズムの調整 娯楽や老人会などによる日常生活の忙しさ 公園でゆんたく 自分でつくった野菜は特別おいしい 農業を共有することによる安心感と今後の楽しみ ジャガイモほり開催による地域住民との関わり
5. 心身の安寧のための趣味の継続	畑に行くことによる体調管理や幸福感とリラックス効果 農業は人材育成と類似し、興味が尽きないほど未知数で魅力的 農業は運動であり、趣味の1つ 趣味は段位を持っている囲碁 イザリは趣味
6. 長寿への思い	自分の今後の心配と長生きしている方への羨望
7. 子や孫の顔を見ることが楽しみで生きがい	子や孫の顔を見ることが楽しみで生きがい
8. 現在の生活の継続を希望	現在の生活の継続を希望

夏休みだから来ているさ。」と〈子や孫の顔を見ることが楽しみで生きがい〉になっていた。

【現在の生活の継続を希望】では現在の生活を継続することに対して、今後も「(今の生活を続けることは)願ってもないこと。」とっており、「そうだね、こんな感じで生活したいと思うさ。」と〈現在の生活の継続を希望〉していた。

3) 最期の演出についての思い (表4)

最期の演出についての思いは、【最期に向けた準備】、【看取り期の希望】、【最期の場所の選択】、【お墓に対する希望】、【葬儀の希望】、【法要に関する希望】、【ひとり暮らしによる死への不安】の7カテゴリーに分類された。

【最期に向けた準備】では、「妻にも息子にも(尊厳死宣言に)書いてもらっているよ。」と〈リビング・ウィルの準備〉をしたり、〈納骨堂との契約〉をしていた。また、「おやじがいくつになったらって。(中略)お墓は自分の入るところまでつくっていかないとよ。」と〈墓地整備〉をしたり、〈財産分与の準備〉をしている等、積極的に終活をしていた。

【看取り期の希望】では、親などの〈看取り期の経験〉から〈最期は家族全員集まって欲しい〉ことや「今、んー、ぼつぼつ話はしたりしてるんですけど。もし、私たちがあの一ホームに入ったりとか、ぼけて将来、し…、将来あなた方も仕事があるから、こっちが、あつ、あなたは長女の誰って、次女の誰、三女の誰ってわかれば来ても意味があるけど、この…わからなければね、ふつうの人と同じで…おんなしだから来なくてもいいと言っている。(中略)」と〈家族の判別の有無による面会の希望〉をしている一方で、〈現時点で会いたい人はいない〉と看取り時の面会の希望がなかった。また、「医者任せにしよう。医者が一番信頼してるからね、だから、医者の指示通りにしか生きられんなあつと思うけど。もちろん、この…いろいろ工夫して長生きとかいうのはね、必要ないと思うけどね。自然に生きれる分生きればいんじゃないかと思うけどね。(中略)」と〈自然死を希望〉していた。

【最期の場所の選択】では、〈最期は病院を希望〉している一方で〈在宅で家族に看取られたい〉と在宅での最期を希望していた。また、〈現時点ではわからない〉という語りもあった。

【お墓に対する希望】では〈親族と一緒に墓に入る予定〉であり、「やっぱりお墓さー。」と〈お墓に入ることの希望〉があると明確である一方で、「別にお墓じゃなくてもいい。」と〈お墓に対するこだわりはない〉ことが明らかとなった。また、〈亀甲墓ではなく普通のお墓でいい〉という希望もあった。

【葬儀の希望】では「そう。でも、49日なんかやらな

くてもいいけど、お葬式はちゃんとして送って欲しい。」と〈お葬式はしてほしい〉が〈友達は葬儀に呼ばなくてよい〉ことや〈他人に迷惑をかけたくないという葬式の希望〉をしていることがわかった。また、埋葬方法としては、〈火葬の希望〉や〈永代供養の希望〉等〈様々な埋葬法への考え〉があった。

【法要に関する希望】では〈初七日で全てを終わらせたい〉と思っている一方で、〈旧盆の希望〉や〈年忌法要の希望〉、〈100か日法要の希望〉といった明確な希望を持っていた。

【ひとり暮らしによる死への不安】では「1人だから夜になると死ぬのかなって思う。急に気分悪くなった時にそう思うねえ。」と〈ひとり暮らしによる死への不安〉があった。

表4 最期の演出について

カテゴリー	サブカテゴリー
1. 最期に向けた準備	リビング・ウィルの準備
	納骨堂と契約
	墓地整備
	財産分与の準備
2. 看取り期の希望	看取り期の経験
	最期は家族全員集まって欲しい
	家族の判別の有無による面会の希望
	自然死を希望
3. 最期の場所の選択	現時点で会いたい人はいない
	最期は病院を希望
	在宅で家族に看取られたい
	現時点ではわからない
4. お墓に対する希望	親族と一緒に墓にはいる予定
	お墓に入ることの希望
	お墓に対するこだわりはない
	亀甲墓ではなく普通のお墓でいい
5. 葬儀の希望	お葬式はしてほしい
	友達は葬儀に呼ばなくてよい
	火葬の希望
	他人に迷惑をかけたくないという葬式の希望
	様々な埋葬法への考え
	永代供養の希望
	家族だけの葬儀を希望
家族の意思による沖縄式の葬儀の実施	
6. 法要に関する希望	初七日で全てを終わらせたい
	旧盆の希望
	年忌法要の希望
	100か日法要の希望
7. ひとり暮らしによる死への不安	ひとり暮らしによる死への不安

4) 沖縄の文化の影響について (表5)

沖縄の文化の影響については、【宗教の影響】、【祖先崇拜に対する考え】、【子孫や先代とのつながり】の3カテゴリーに分類された。

【宗教の影響】では「インタビューの内容を見た時にヌジファとあって、はて?という感じで思った。(中略)」と〈宗教の違和感〉や〈しきたりに対するこだわりはない〉という一方で、〈宗教の影響〉や〈宗教における自分の立ち位置〉を考えていた。

【祖先崇拜に対する考え】では拝みに関して、〈人間は神ではないために行う拝み〉としてとらえていた。また、〈祖先崇拜は多宗教とは異なり沖縄の心〉であり、さらに、〈親の死ぬ間際にみた神業のような姿勢から学ぶ宗教の心〉、〈祖先崇拜以外の宗教に対する否定的な考え〉もあり、〈祖先崇拜は暗黙の了解〉であるとしていた。

【子孫や先代とのつながり】では、「それで僕らはあの墓を…、祖先がその…生きていた人のつながりを持つのは墓なのよ。それを考えているから、だからやっぱり自分の墓でもいい。ムンチュ墓でもいいしね。共通の敬うところがあればいいよ。(中略)」と〈墓は子孫や先代とのつながり〉であると考えていた。

表5 沖縄の文化の影響について

カテゴリー	サブカテゴリー
1. 宗教の影響	宗教の違和感
	しきたりに対するこだわりはない
	宗教の影響
2. 祖先崇拜に対する考え	宗教における自分の立ち位置
	人間は神ではないために行う拝み
	祖先崇拜は多宗教とは異なり沖縄の心
	親の死ぬ間際にみた神業のような姿勢から学ぶ宗教の心
3. 子孫や先代とのつながり	祖先崇拜以外の宗教に対する否定的な考え
	祖先崇拜は暗黙の了解
	墓は子孫や先代とのつながり
	お墓は銘々あってよい
	旧盆や清明祭は親族の交流の場として必要

5) 看取りに対する家族の思い (表6)

看取りに対する家族の思いについては、【家族のことに関してはどうなるかわからない】、【それぞれの考え方の尊重】、【家族と看取りの話し合い】、【最期の看取りは子どもが頼り】、【法事に来るか心配】の5カテゴリーに分類された。

【家族のことに関してはどうなるかわからない】では、〈家族のことに関してはどうなるかわからない〉と他の

事については考えていなかった。

【それぞれの考え方の尊重】では、「(妻には)自由に宗教してほしい」と(それぞれの考え方の尊重)をしていた。

【家族と看取りの話し合い】では、(家族との看取りの話し合い)をしている一方で(子と最期に関する話はない)と考えており、また、(相談できる子とできない子がいる)ことが明らかとなった。さらに、(家族会議の予定)はあるが、(寝たきりにならない最期を迎えたい)という思いを持っていた。

【最期の看取りは子どもが頼り】では「長男医療職さ。だから、見てねって(笑)冗談で言うわけさ。長女と次女が…、あつ長女と長男が近くにいるから。そうね(何かを頼むときは長男や長女にお願いをする)。もうね、あれするっていったら、次女は遠くに住んでるから、あれもまたよく来てくれるから。(中略)」と(最期の看取りは子どもが頼り)としていた。

【法事に来るか心配】では「娘はC地域にいるから100日はどうかな。もう、まあ、こっちにいる親戚だけで…、いや、来るかな。1人っ子だからな。」と(法事に来るか心配)をしていた。

表6 看取りに対する家族の思い

カテゴリー	サブカテゴリー
1. 家族のことに 関してどうなるかわ からない	家族のことに 関してはどうなる かわからない
2. それぞれの考え 方の尊重	それぞれの考え 方の尊重
3. 家族と看取りの 話し合い	家族との看取り の話し合い
	子と最期に関す る話はない
	相談できる子と できない子がい る 寝たきりになら ない最期を迎え たい 家族会議の予 定
4. 最期の看取りは 子どもが頼り	最期の看取りは 子どもが頼り
5. 法事に来るか 心配	法事に来るか 心配

V 考察

1. 看取りに対する思い

老いを感じる時に関して、5つのカテゴリーが抽出された。【身体的機能の変化の実感】や【認知能力の衰えを実感】と、加齢に伴う身体的・認知的変化を実感していることがわかった。このような加齢に伴う変化への対応として、高齢者は【健康に留意して日々実践】して(健康に生活するための独自のこだわり)をもち、(日々の

体操の実践)等をしていると考えられる。また、現在の生活として挙げられている【やる気の保持とゆっくりとした生活】や【充実した現在の日課の維持】、【心身の安寧のための趣味の継続】等、高齢者は現在の生活を保持しつつ、積極的に活動していることが明らかとなった。村田ら(2007)によると、活動能力が高い高齢者は気分が良好であると報告している。つまり、本研究の高齢者は加齢に伴う変化を感じながらも趣味や日常生活の日課等、生活に活気があり、生活をしていることが明らかとなった。

今後の生活に関しては、【長寿への思い】があり、【子や孫の顔を見ることが楽しみで生きがい】であることが明らかとなった。現在の生活をする中で、高齢者のほとんどが【現在の生活の継続を希望】しており、また、最期の演出について、【最期に向けた準備】や【看取り期の希望】、【最期の場所の選択】等、高齢者自身が描く最期の演出や自身の思いが明確になされていた。木内ら(2004)は、高齢者の終末期における希望の内容として、死ぬ時に限らず、現在から死後のことに及んでおり、高齢者の終末期の捉え方は個人により異なると報告している。これは、本研究と同様の結果を示した。また、大橋(2002)は、本人の死後のことについては、本人が生き残っているあいだに準備しておくことが必要になると述べている。対象者の中には尊厳死宣言書の家族による署名やお墓等の【最期に向けた準備】を行っていた。これは、高齢者が思い残すことなく最期を全うすることにつながると考えられた。島田ら(2015)によると、終末期における希望の伝達について、家族との終末期医療の希望の会話による伝達は、本人の死に対する態度や人工栄養の希望と有意に関連しており、自らの死にゆくプロセスと向き合うことのできる人で高まる可能性を示している。このことから、【最期に向けた準備】の段階から家族に【看取りの希望】等を伝えることで自分の死と向き合うことにつながると考えられた。加藤ら(2020)によると、延命治療に関する考えでは治療を望まないとする回答が8割を超えたと報告しており、本研究における(自然死を希望)と類似した結果となった。自然死を希望する理由として、高齢者は【身体的機能の変化の実感】や【認知能力の衰えを実感】していることや友人とのゆんたく等から死は誰でも通る道であり、身近に感じていることが考えられる。さらに、【最期に向けた準備】では(墓地整備)をしていることが明らかとなった。岡本ら(2017)は、終活の関心の高さとともに積極的に死に向き合う文化が醸成されつつあると述べており、木村ら(2015)は、死の準備行動をとる理由として、高齢者は多様な希望を残すためではなく、迷惑をかけないためという他者への配慮に基づき行われ、高齢者にとっては現状整理と問題

把握が促されること、他者へ迷惑をかけるという不安からの解放につながると述べている。このことから、死の準備行動として【最期に向けた準備】において（墓地整備）をしており、準備行動という点で【お墓に対する希望】と関連していると考えられる。〈親族と一緒に墓に入る予定〉や〈お墓に入る希望〉の準備段階として、〈墓地整備〉を現時点で進めていると推察できる。そのため、元気なうちから看取りを含めた今後に対する高齢者の思いを引き出すことが重要であると考えられる。

【最期の場所の選択】では、在宅や病院及び（現時点ではわからない）と最期の場所の希望は個人差があることが明らかとなった日本財団の調査（2020）によると、最期を迎える場所の希望として自宅が58.8%、医療施設が33.9%、介護施設は4.1%、その他3.2%であり、自宅で最期を迎えたいと考えているものが多かったことを報告している。一方で、「病院」、「ホスピス」、「自宅」など分散しており、その意向には個人的要因、環境要因、死生観が関連しているという報告もある（友居，2019）。このことから、高齢者は自宅を希望しつつも、すくなくならず実際に最期を迎える時にならないと最期を過ごす場所の決定を躊躇している傾向にあり、高齢者自身が置かれている状況によって最期の場所の選択に影響を与えると考えられる。本研究は、研究対象が5人であり、少数数であるため研究に限界がある。そのため、今後対象人数を増やし、最期の場所の選択の希望について分析が必要である。

家族との看取りの話し合いでは、【法要の希望】については話しているが、【看取り期の希望】に関しては話していない現状にあった。こうした現状を生み出す要因として、「まだはやいよ」という家族の思いが本人の伝えたい気持ちを阻害している可能性があると考えられる。また、【最期は子どもが頼り】としているものの、【家族と看取りの話し合い】では〈相談できる子とできない子がいる〉ことや「この話はまだ早いよ」という家族からの発言があることにより、看取りについて話しにくい現状にあると考えられる。60歳以上の高齢者の希望する医療・ケアについて、5割程が書面には残さないが、家族に口頭で伝えていると報告している（青井ら，2019:人生の最終段階における医療の普及・啓発の在り方に関する検討会，2018）。家族との話し合いの場は増加傾向にあるとはいえ、高齢者の多くは、リビング・ウィルを知らないという報告がされている（彦ら，2011）。このことから、看取りに対する希望はあるが、それを伝えることは少なく、自分の意思表示をする方法を知らないことや意思表示をする場の提供が少ないことが考えられた。そのため、具体的な話し合いを行っていない状況に繋がっていると考えられる。このことから、〈家族会議の予定〉は、いざと

いう時のために自分の意思を伝えておきたいという気持ちの表れの一つであると推察できる。さらに、高齢者の最期に対する思いを伝えるためには、タイミングや伝える場も重要となるのではないかと考える。また、最期は迷惑をかけたくない思いとして、〈初七日で全てを終わらせたい〉と【法要の希望】があると伺える。このことから、現在の生活の継続をしながら、終末期に向けた準備として、家族の意思を考慮しつつ、本人の意思を尊重し、高齢者と家族が互いに納得できるような援助をしていくことが必要であることが示唆された。

【ひとり暮らしによる死への不安】については、【病気にに対する不安や悩み】や【老いへの寂しさ】があることによってひきおこされている可能性がある。しかし、大橋（2002）によると、高齢者の死生観について、“この世”（イチミ：生き身）と“あの世”（グソー：後生）は連続性を持ち断続していない。そのリアルな感覚が、結果的には死をめぐる緊張感や恐怖感を緩和させていると述べている。本研究においては死への不安があり、このことは、現在ひとり暮らしであり、身近に頼れる人や語れる人が少ないことであの世に対して否定的になっている可能性が死への恐怖や緊張感の緩和がなされていないと考えられる。そのため、高齢者が家族や身内及び友人と語れる場の提供をアプローチしていくことが必要となると考える。しかし、本研究ではひとり暮らしが5人中1人であり、研究に限界がある。そのため、今後、研究の対象人数を増やしてひとり暮らしにおける死への不安等の分析をする必要がある。

2. 沖縄の文化の影響について

沖縄の文化の影響に関して、【宗教の影響】、【祖先崇拝に対する考え】、【子孫や先代とのつながり】の3つのカテゴリが抽出された。

【祖先崇拝に対する考え】から、〈祖先崇拝は多宗教とは異なり沖縄の心〉であり、〈祖先崇拝は暗黙の了解〉であるといった、沖縄の文化である祖先崇拝が影響していることが明らかとなった。こうした祖先崇拝が【法要に関する希望】に影響を与えていると考えられる。

また、お墓をつくることや旧盆等の行事をすることは【子孫や先代とのつながり】もあるが、その中には〈親の死ぬ間際にみた神業のような姿勢から学ぶ宗教の心〉や〈宗教は暗黙の了解〉といった幼少期からの親の影響を受けていることが明らかとなった。大橋（2002）は、自分の死後は、残された家族・親族との関係が日々のウートートー（お茶を上げ手を合わす日常の祈り）や年中行事を通して保たれ、その関係は継続されるという祖先崇拝を基本とするコスモロジーによって支えられていると報告している。また、與古田（1997）の研究によると、

沖縄の人々を取り巻く宗教的風土が、若者の意識や態度に影響を与えている可能性も無視できないものと述べている。さらに、人々の生活に基づいた宗教行動は、時代の推移はあっても依然根強く、若い世代にも継承されつつ存続している可能性を報告している。このことから、高齢者の祖先崇拝への思いや態度が子孫にも反映し、子孫や先代とのつながりを持たせている。そのため、〈年忌法要の希望〉や〈旧盆の希望〉といった【法要に関する希望】や【祖先崇拝に対する考え】に沖縄の文化が影響を与えていることが推察される。このことから、【現在の生活の継続を希望】をしている高齢者に対して、旧盆や清明祭といった【法要の希望】に関しても高齢者が沖縄の心と崇拝している文化を把握することが必要となる。

だが、現在の若者は清明祭や旧盆といった行事に対して、意味を知らずに参加している傾向にあると考えられる。祖先崇拝では本来の意味を理解することで沖縄の文化を配慮した看取りケアにつながると考える。しかし、沖縄の祖先崇拝に違和感がある高齢者もあり、沖縄の文化に対する考えには個人差があることを示しており、必ずしも沖縄に住む高齢者に対して祖先崇拝が看取りケアに影響を及ぼしているわけではない。そのため、看取りケアの際には対象者が希望する文化を把握し、支援することが大切である。それらを踏まえて、高齢者一人一人の文化を考慮した日常生活のケアや看取りケアを医療職が実践していくことが必要となると考える。

3. 今後の課題

今回の研究では、研究対象者選定の際に1か所の老人会に依頼し、研究に同意の得られた方を対象としたため、対象者の属性に偏りが見られた。今後研究対象の人数を増やし、地域で生活する高齢者に対するが考える看取り支援のあり方を検討していくことが課題である。

VI 結論

本研究の結果として、地域で生活する高齢者の看取りに対する思いや沖縄の文化が高齢者の看取りに及ぼす影響が明らかになった。

1. 看取りに関して、【最期に向けた準備】、【看取り期の希望】、【最期の場所の選択】等、高齢者自身が描く看取りに対する思いは明確であることが明らかとなった。しかし、家族と看取りの話し合いでは、【看取り期の希望】は話していない現状があり、こうした現状を生み出す要因として、〈相談できる子とできない子がいる〉ことや「その話はまだ早いよ」という家族の

発言が本人の伝えたい気持ちを阻害している可能性が考えられた。これらのことから、現在の生活の継続をしながら、終末期に向けた準備として、本人の意思を尊重し、家族の意思を考慮しつつ、高齢者と家族が互いに納得できるような支援の必要性が示唆された。

2. ひとり暮らしの方は夫婦のみの世帯に比べて、死への不安があることが明らかとなった。ひとり暮らしであることにより、身近に頼れる人が少ないことである世に対して否定的になっている可能性が死への恐怖や緊張感の緩和がなされていないと考えられる。そのため、家族や身内及び友人、専門職等で語れる場について検討していく必要性が示唆された。

3. ほとんどの高齢者が【祖先崇拝に対する考え】から、〈祖先崇拝は多宗教とは異なり沖縄の心〉であり、〈祖先崇拝は暗黙の了解〉と捉えており、祖先崇拝は個人の考えはあるものの看取りに影響していることが示唆された。看取りをする際には本人が希望する看取りに関する沖縄の文化的な風習を把握して支援を行っていくことが大切であると考えられる。

本研究は、本看護学科の卒業研究の一部を加筆・修正したものである。

謝辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただきましたA市の区長および老人会の皆さまに心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 荒木晴美, 新鞍真理子, 炭谷靖子. (2008). 介護者が自宅での看取りを希望することに関連する要因の検討. 富山大学看護学会誌, 第7巻, 2号, 51-60.
- 林美枝子. (2014). 在宅死に関する新たな家族介護者像の模索と看取り文化の再生の可能性について. 札幌国際大学紀要, 第45号, 77-85.
- 彦聖美, 田島祐佳. (2011). 高齢者が捉える生と死に関する文献検討. ホスピス・在宅ケア, 第19巻1号, 42-49.
- 平川仁尚, 益田雄一郎, 葛谷雅文, 井口昭久, 植村和正. (2006). 終末期ケアの場所および事前の意思表示に関する中・高齢者の希望に関する調査. ホスピスケアと在宅ケア, 第38巻, 3号, 201-205.
- 人生の最終段階における医療の普及・啓発の在り方に関する検討会. (2018). 人生の最終段階における医療に

- 関する意識調査報告書。
https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/saisyuiryo_a_h29.pdf
- 加藤さゆり, 徳重あつ子, 杉浦圭子, 久山かおる, 布谷麻耶. (2020). 出雲地域における在宅高齢者の死生観と人生の最終段階の医療に関する意識との関連—アドバンス・ケア・プランニングの実現に向けての検討—. 日本健康医学会雑誌, 29 (3), 288-302.
- 川元恵美子. (2013). 久高島における伝統的信仰と高齢者福祉をめぐる現状—エンド・オブ・ライフとスピリチュアルケアの視点から—. 地域研究, 第2号, 23-44.
- 木村由香, 安藤孝敏. (2015). エンディングノート作成にみる高齢者の「死の準備行動」. 応用老年学, 第9巻, 第1号, 43-54.
- 木内千晶, 吉田千鶴子. (2004). 高齢者の希望する終末期の迎え方. 岩手県立大学看護学部紀要, 第6号, 77-82.
- 近藤功行. (1992). 終末期ケアと伝統的宗教儀礼の関わり—琉球列島における調査研究—. 日本公衛誌, 第39巻, 第10号, 799-807.
- 厚生労働省. (2020). 令和2年(2020)人口動態統計月報年計(概数)の概況.
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai20/dl/gaikyouR2.pdf>
- 内閣府. (2020). 令和3年版高齢者白書 高齢化の現状.
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/gaiyou/03pdf_indexg.html
- 日本財団. (2021). 人生の最期の迎え方に関する全国調査.
<https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/pr/2021/20210329-55543.html>.
- 村田伸, 津田彰, 大田尾浩. (2007). 在宅高齢者の活動能力と気分との関連—要介護高齢者と非介護高齢者との比較—. 日本在宅ケア学会誌, 第11巻, 第1号, 66-71.
- 大橋英寿. (2002). 長寿沖縄の死生観—フィールドノートから—. 緩和医療学, 第4巻, 第1号, 23-27.
- 大城凌子. (2005). 高齢者の看取りを支えるコミュニティ・ケアのあり方に関する研究. 琉球大学大学院保健学研究保健学専攻保健医療学分野修士論文.
- 島田千穂, 中里和弘, 荒井和子, 会田薫子, 清水哲郎, 鶴若麻理, 石崎達郎, 高橋龍太郎. (2015). 終末期医療に関する事前の希望伝達の実態とその背景. 日本老年医学会雑誌, 第52巻, 第1号, 79-85.
- 清水みどり. (2005). 介護老人保健施設での死の看取りを可能にする要因の考察—看護管理者へのインタ
- ビューから—. 渦青陵大学紀要, 第5巻, 347-358.

